

山崎 勝之 鳴門教育大学大学院教授 予防教育科学センター所長



が、学校現場の壁は大きいぞ。多忙感極まる中、新規

も予防教育の研究のため、鳴門教育大学へ長期派遣され始めたらしい。予防教育コーディネーターも続々と誕生している。

『予防教育の光景』この教育は全国普及を目指すという。それはそうだろう。そもそもこの教育は、全ての子どもに常時実施する必要から始まった。本気で子どもを守るのなら当然のことだ。既に、徳島県外の複数の府県で大きく動き出したようだ。学校の現職教員も予防教育の研究のため、鳴門教育大学へ長期派遣され始めたらしい。予防教育コーディネーターも続々と誕生している。

いじめ問題に立ち向かう

—30—

予防教育⑧

な教育には抵抗もあるだろう。学んだことのない教育を、どう現場に下ろしていくというのだ。センターに疑問をぶつけてみると、「分かっていません」と言い切った。全国普及は難しいが、この教育には底知れぬ可能性を感じる。

中心とした評価ツールを用い、教育の目標が到達できたかどうかを統計的に調べた。その結果を総合して言えば、目標達成率94・1%になり、悪化ゼロである。これだけの授業をこなせば、悪化事例の一つくらい出るのが通常だが、まさに

迫力ある効果が確認される。通常なら悪化する現状を、この教育が逆に向上させるという結果だ。学習意欲までも高まっていた。と欲求も高まっていた。と

学習意欲・生活満足度が向上

▼効果の総合提示

この予防教育の効果評価が目指すところは、無作為比較試験という科学的な評価である。その評価は経費と労力がかかるので、段階を踏んでそこに到達しようとしている。今年3月にその第1段階の評価がまとまった。3千人を優に超える児童・生徒の結果である。その評価は、量的(数値)的評価と質的評価に分かれる。まず量的評価では、教育の実施前後で質問紙を



全国普及の手順を示した冊子

3年半ほどの短い期間に100を超えるクラスを

「奇跡的教育」と言われるゆえんがここにある。質的評価は、学校側から自主的に提出された、予防教育を受けた児童からの感想文の分析である。複数の評定者が独立して、一致率を気にしながら分析を進めた。その結果、子どもたちが喜ぶとして授業に参加し、目標に沿って伸びている姿が明らかになった。

この教育の普及は、文科省から概算要求事業として4年ほど前から支えられている。世界中の予防教育との連携も十分である(拙編著「世界の学校予防教育」金子書房参照)。